



Data

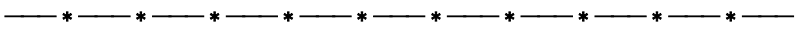
監督: 越川道夫
出演: 貫地谷しほり/山田真歩/永井大/川口覚/松原豊和/渡辺早織/鈴木晋介/宇野祥平/滝沢涼子/木内みどり

👁️👁️ みどころ

「生みの親VS育ての親」をテーマにした『八日目の蟬』(11年)は、「未成年者略取誘拐罪」の成否がポイントだったが、同じテーマの本作は、「特別養子縁組」をめぐる論点が!

それを追求していけば、『マリッジ・ストーリー』(19年)と同じような「法廷モノの名作」になる可能性があったが、越川監督はそれを拒否し、あくまで人間的解決を目指すことに。そのため、『夕陽のあと』という美しいタイトルにするとともに、「島の人はいみんなお母さん」と言うキーワードで結末を迎えさせたが、その是非は?

町役場の福祉課の青年の公私混合ぶりは、「桜を見る会」の安倍総理以上に目に余るし、プライバシーの無視も目に余るが、それでも本作のようにうまく着地できれば結果オーライ。たしかにそのとおりだが、ちょっと甘すぎるのでは? 私にはそう思えたが・・・。



■□■生みの親vs育ての親。特別養子縁組とは?■□■

本作のテーマは、生みの親vs育ての親。そう聞くと思い出す名作は、成島出監督の『八日目の蟬』(11年)。同作では、井上真央vs永作博美の美女対決(?)が興味深かった。そして、私は『邦画にもこんな名作あり』と誇れる女たちの物語を、男もしっかり学びたい。」と書き、星5つを付けた(『シネマ 26』195頁)。同作は、法的には「未成年者略取誘拐罪」という恐ろしい重罪からの「逃避行」という、『砂の器』(74年)を彷彿させる論点を含ませながら、「蟬は、何十年も土の中にいて、地上に出て7日間で死ぬという。でも

もし、7日で死ななかつた蟬がいたら・・・」というすばらしい問題提起をしていた。また、同作では、エンジェルホームという面白い「現代の駆け込み寺」が大きな存在感を発揮していた。

そんなスリリングな展開で観客の目を惹きつけた同作に対して、本作の法的論点は特別養子縁組。これは、普通養子縁組とは別の制度で、子供の福祉の増進を図るために、養子となる子供の実親（生みの親）との法的な親子関係を解消し、実の子と同じ親子関係を結ぶ制度。この特別養子縁組が家庭裁判所で認められるためには、養子となる子供が8歳未満であること、生みの親の同意が得られていることなど、いくつかの要件を満たす必要がある。しかし、普通養子縁組が年間8万件程度成立しているのに対し、特別養子縁組の年間成立数は約500件に留まるから、その実現はかなり厳しいのが実情だ。

本作冒頭には7歳の男の子・日野豊和（松原豊和）と、それを優しく見守る父親・優一（永井大）と母親・五月（山田真歩）の姿が登場する。しかし、ストーリーが展開するにつれてわかってくるのは、この2人は実の両親ではなく里親であること。つまり、児童相談所から当時赤ん坊だった豊和を預かり、養育してきたわけだ。そして、この2人は今、豊和との特別養子縁組を進めるべく、五月の幼馴染で町役場の福祉課に勤める新見秀幸（川口寛）らと相談をしていたが、なぜそんな事情に・・・？

■舞台は鹿児島県の小島、長島町。タイトルの意味は？■

田舎町にはどこにでも地元のお祭りがあり、お祭りの時は神輿や笛太鼓で賑やかになるが、本作では小学校の生徒たちがそのための太鼓の練習をしている風景が再三繰り返される。その舞台は、鹿児島県の最北端にある青い海に囲まれた島・長島町だ。鹿児島弁に似た方言はわかりにくい、家業であるブリの養殖を継いだ優一らの仕事ぶりは興味深い。本作冒頭、港の食堂で働く佐藤茜（貫地谷しほり）の姿が映し出されるが、彼女だけは地元の人間ではなく、1年ほど前に長島にやってきてこの食堂で働いているらしい。見るからに「曰く因縁」がありそうだが、茜は垢抜けした美人だから、時々その食堂にやってくる新見はそんな茜に気があるようだが・・・。

ちなみに、本作のタイトル『夕陽のあと』とは一体ナニ？これは導入部の五月のセリフに出てくる言葉で、この島では夕陽の後の海が一番美しいらしい。なるほど、なるほど。しかし、越川道夫監督は、本作になぜそんなタイトルを？

■法的論点をめぐる脚本の出来は？監修は？■

優一も五月も赤ん坊の時から育ててきた豊和が7歳になった今、特別養子縁組ができることに喜びでいっぱい。それには生みの親の承諾が必要だが、その所在が不明の場合は親権を児童相談所が持っていることもあって、家裁での「特別養子縁組」の手続はスムーズにできるらしい。そんな予想を聞けば、五月も優一も手続に何の不安もなしだ。

ところが、その手続を進めているうちに、①なんと豊和は7年前に東京のネットカフェで起きた乳児置き去り事件の被害者だったこと、②懲役1年執行猶予3年の判決を受けた豊和の母親の名は、佐藤茜だったことが判明したからビックリ。まさか、あの食堂で働いている友人の佐藤茜と同姓同名の女が？いやいや、そうではない。彼女こそが豊和の産みの母親！？そんなバカな・・・。

本作はそんな重大な法的論点を突然スクリーン上に提示するが、なぜそんな重要な事実が今になって「判明」したの？7年前の乳児置き去り事件は新聞でも大きく報道されたのだから、そもそも児童相談所が豊和を預かる時点でちゃんと調べれば、そんな事実は把握できていたはずだ。『八日目の蟬』でも、「弁護士の私としては、沢田夫妻が希和子を新たな従業員として採用するについては税務申告や社会保険の関係で少なくとも住民票の提出を求めるはずだから、希和子と薫の間に母子関係がないことなどすぐにバレてしまうはずだということを指摘しないわけにはいかない。」と法的論点の処理に少し甘い点があることを指摘したが、本作は「特別養子縁組」の可否を巡って産みの母親と育ての母親が対立する案件だから、なおさらその法的論点をいい加減にすることはできない。なぜなら、それをいい加減にしてしまつては、ストーリーの真実味がなくなってしまうからだ。そんな観点からは、本作の脚本の出来は？また、本作の法律面での監修は？

豊和の生みの母親が茜であることがハッキリわかった時、五月の顔が怒りでひきつったのは当然。しかし、それがこのような形で判明した今、茜はどうするの？今まで通り陰からそと豊和を見守るだけで済ませるの？それとも、素性がばれてしまったのをきっかけに、「私こそが生みの母だ」と家裁に主張するの？もしそうなら、茜から親権回復の申立ができるはずだが・・・。

■□■この公私混同は？(1)■□■

最近の朝日新聞は、「桜を見る会」をネタに、安倍晋三総理の「公私混同」ぶりを責めたる論調が目立つ。私の目にもそこには確かに公私混同があった事は間違いないと見えるが、それは程度問題で、多少の公私混同は誰にでもあること。したがって、そのテーマばかりで新聞の多くの紙面を使ったり、国会の多くの時間を使うのは如何なもの・・・？

そんな目で見ると、本作では町役場の福祉課に勤める秀幸の公私混同ぶりが目立つ。秀幸が茜に好意を持っているのは最初からミエミエだが、日野夫妻が豊和との特別養子縁組を進めるお手伝いをしていた秀幸は、突然茜が懲役1年執行猶予3年の判決を受けた豊和の生みの母親だったことを知ってビックリ。そんな事実が判明した後、それまで仲のよかった茜と五月が突然反目しあい始めたことに大いに悩んだのも当然だ。

本作中盤に登場する茜と五月の大ゲンカは、ある意味で本作のハイライト。これは12月7日に観た『マリッジ・ストーリー』(19年)のラスト前における、スカーレット・ヨハンソン扮するニコールと、アダム・ドライバー扮するチャーリーとの大ゲンカに匹敵す

るハイライトだから、しっかり鑑賞したい。『マリッジ・ストーリー』では、その大ゲンカがその後の意外な結末を導いたが、本作中盤、これだけの大ゲンカをして互いに言いたいことを全部ぶちまけあった茜と五月のその後は？そう思っていると、そこにしゃしゃり出てきた秀幸が、茜に対して「僕と結婚しよう」、そして「五月が優一と共に豊和を育てるのを外から温かく見守っていこう」と言い始めたからアレレ。これこそ公私混同の最たるもので、「桜を見る会」の比ではないのでは・・・？

■□■この公私混同は？(2)このプライバシー無視は？■□■

茜が大ゲンカをした後、茜が家裁に「親権停止の取り消しの申し立て」を行ったことに驚いたのは五月と優一。それによって特別養子縁組の手続きが暗礁に乗り上げたことに悩み、業を煮やした五月は、「豊和と茜のすべてを知りたい」と考え、7年前に何が起こったかを確かめるべく東京に向かうことに。しかし、そこには何と秀幸が付き添っていたから、アレレ。町役場の福祉課の職員がこんなことまでするの？これも、れっきとした公私混同では？

さらに弁護士の私が驚いたのは、事件現場のネットカフェや茜が働いていた縫製工場等を訪ねた五月と秀幸に対して、重大なプライバシーに属する茜の資料を何のためらいもなく提供していること。とりわけ、縫製工場では茜のプライベートな日記まで平気で見せていたから、アレレ。この脚本は一体どうなっているの？ちなみに、これらのストーリー展開はそれによって茜が紛れもなく豊和の母親であったことを強調するためのものだが、その是非は？

■□■「島の人はみーんなお母さん」。この結末の是非は？■□■

本作は村祭りの太鼓をたたく練習を一生懸命にやっている豊和の姿が印象的だが、7歳の豊和が、目の前に突如勃発した、生みの親VS育ての親の争いが理解できるはずはない。また、茜は家裁に親権停止の取り消しの申し立てを行ったそうだが、普通そんな手続きは素人には難しいので、弁護士に依頼したはず。すると、必然的に五月の方も弁護士に依頼し、その結果、『マリッジ・ストーリー』で観たのと同じような、家裁を舞台に生みの母の代理人弁護士VS育ての母の代理人弁護士による激しい法廷論争が……。そういう視点で本作を作れば、本作も法廷モノの名作になるかもしれないが、それを全く望まなかった越川監督は、本作でそんな法的論点の整理や追及は一切せず、あくまで人間的な解決を目指している。

そのため、本作後半のポイントになるのは、7歳の豊和が1人で茜の家を訪れ、ケンカ状態にある茜と五月が早く仲直りして欲しいと訴えるとともに、そこで「島の人はみーんなお母さん」というキーワードを繰り返すことだ。なるほど、この島では「島の人はみーんなお母さん」だそうだが、弁護士の私に言わせれば、そんなキーワードですべて問題が

解決できるというのは少し甘すぎるのでは・・・？そう考える私には、本作ラストにおける、小舟の中で茜と五月が2人で交わす静かなクライマックスに不満があるが、越川監督の流儀に賛成の人には、このクライマックスは極めて人間的で美しいシーンになるだろう。そしてまた、それが理解できれば、本作のタイトルを『夕陽のあと』としたのにも納得できるはずだ。

2019（令和元）年12月18日記